

特集：文化財学習を考える I

小学校で文化財を学ぶ意味

－沖縄県西原町を事例に－

里井洋一

① はじめに

琉球大学教育学部社会科教育研究室が主催する授業「社会科教育調査」は 1996 年から始まり、今年で 11 年目を迎えるに至った。

この間、①竹富町、奄美大島瀬戸内町、名護市、琉球大学周辺の小学校 3・4 年教材づくり、②県立博物館とのジョイントでさつま芋づくり、米づくりなどの体験学習、③竹富町において行われた実践を追うことによって、その実践を行った教師から学んだ記録づくり、などを行ってきた。それらの成果は冊子および CD・DVD 等の形で残されている¹。

この「社会科教育調査」の指導には、琉球大学教育研究科教科教育専攻社会科教育専修の大学院生があたり、社会科教育研究室の教員が大学院生を指導するという形で行われてきた。ねらいは、大学院生の実践的指導力を強化しようということにある。

11 年目を迎えるにあたる今年 2006 年、琉球大学教育学部では 2 年生に「教職体験 2」という科目を新設することになった。

「教職体験 2」は週 1 度学校現場へ行き、学校のお手伝い、学校体験をするという科目である。10 年間、2 年生を対象に行ってきた「社会科教育調査」と二重負担を 2 年

生に強いることになる。そこで、2006 年度は琉球大学を校区とする西原町立坂田小学校との連携事業として調査を位置づけた。

目標は、学生たちが、坂田小学校の子どもたちに学び、こどもたちにとって意味ある教材の作成することにある。

4 月は、学生たちに坂田小学校区域の社会事象に興味をもってもらおうということで、「棚原探検」という企画を院生たちが準備した²。

5 月には坂田小学校 3・4 年の学年担任団と大学院生・私との意見交換を行った。3 年では地域探検での付き添い、4 年生では文化財学習導入教材を作成することを求められた。

6 月には、3 学年の子どもたちとの町探検を実現した。その前に学生たちは子どもたちとともに回る予定の集落を事前に探検し絵地図を作成した。

現在 2006 年 7 月、学生たちは文化財学習導入教材を準備するために調査の真っ最中である。

では小学校 4 年生で文化財をなぜ学ぶ意味があるのだろうか。子どもたちが暮らす西原町に即して考えてみよう。

¹ 興味があり、必要な方は琉球大学教育学部里井研究室 (098-895-8343、satoi@edu.u-ryukyu.ac.jp までご連絡ください。)

² この実践の分析は以下「特集：文化財学習を考える」という形で本誌に掲載されている。

イ 地域に残る文化財や年中行事

ウ 地域の発展に尽くした先人の具体的事例

② 小学校における文化財学習の位置づけ

文化財学習は、西原町小学校3・4年の社会科副読本には4年生に位置づけられている。教育出版の学習指導計画・評価計画は「地域に残る古い建物や記念碑、行事などを調べ、昔の人はどんな願いをもっていたのかを考える。」というように文化財を地域に残る古い建物や記念碑、行事と言い換えている。この指導計画では、古い建物や記念碑、行事を調べることで、昔の人の願いが直裁的に見えるかのように記されている。

一方、東京書籍年間指導計画作成資料では「地域に残る史跡・道具・文化財を通して、先人が生活を向上させてきたことを具体的に調べ、今と昔のくらしの違いや昔の人の苦心について考える。」と教育出版と異なり文化財を明示している。また、調査のプロセスの中に先人が生活を向上させてきたことという調査の視点を明示している。これら教科書の大綱的基準となった平成十年十二月十四日付文部省告示第百七十五号小学校学習指導要領 第2節 社会〔第3学年及び第4学年〕2 内容、によると、文化財学習に関する記述は下記の通りである。

1 目標

(2) 地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにし、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする。

2 内容

(5) 地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする。

ア 古くから残る暮らしにかかわる道具、それらを使っていたころの暮らしの様子

文化財に即して、言い換えると次のようになる。

地域の人々の生活について、**地域に残る文化財を見学**、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の変化や人々の願いを考え、**地域社会に対する誇りと愛情を育てる**ようにする。

冒頭で、地域の人々の生活と関わる文化財調査を要求している。

この視点は首肯したい。この点は後で詳述する。

しかし、目標部分「地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする」は、手放しで首肯することはできない。調査する中で、地域社会に対する誇りと愛情がもてないような事実も出てくるのが想定することができるからである。

③ 生活と文化財

西原町には、町指定の文化財が三点ある。

①棚原の宮里敏夫氏所蔵の「西原間切棚原村から伊田親雲上宛の板証書」、②嘉手苺の中山 正雄所蔵の「西原中山家文書」、③内間カヤブチ御殿前から出土した「カムイ焼系須恵器」である。

指定文化財以外にも、グスク、嶽、カー（井戸）、獅子舞や棒などの伝統芸能などが文化財とて、町当局は意識している。

小学校4年生が、これら町当局が説明する文化財の説明を調べてみても、東京書籍年間指導計画作成資料が言うような「先人が生活を向上させてきたこと」に行き着くことは難しく、地域の人々の生活と関連して考えることさえ難しい。

たとえば、町が指定した三つの文化財中、①②は古文書資料であり、内容を理解することは3・4年生には困難であり、③は考

古出土品であり、千年位前の奄美諸島との交流を示すカムイ焼系須恵器の県内では数少ない完形資料ではあるが、このカムイ焼系須恵器の前記に記したような説明を、子どもがいくら読んでも、西原の人々の生活に思いをはせることはできない。

では、どうすれば文化財と西原の人々の生活をつないで、子どもたちが考えることができるのであろうか。

④ 仲松弥秀「古層の村」に学ぶ

昔、人々の生活の場は集落を中心とする世界であった。

仲松弥秀は、『古層の村』の中で、「古い村」の立地を下記のように意味づけている。

- 1, 村は、排水のことを考慮して傾斜地に立地している。
- 2, 傾斜のある村の付近は泉や谷川など水の便がいい。
- 3, 傾斜の方向は、南向き斜面である。このことは日当たりだけでなく、夏暑いときには南風が吹き、冬、寒い北風にはさらされない³。
- 4, 村の背後にはクサテ（腰当）森と呼ばれる丘があり、多くの場合、村の守護神の御嶽が位置し、地形上からも村はクサテ（腰当）森に寄り添っている⁴。

村の立地こそ生活の基盤である。村を建てた人々がなぜその地を選んだのか。そこが、なぜ住みたくなる場所であったのか。子どもと一っしょに考えることが、文化財学習の基盤になると私は考える

³仲松弥秀『古層の村 沖縄民俗文化論』15～17 ページ（沖縄タイムス、タイムス選書 4、1977 年）

⁴仲松弥秀『古層の村 沖縄民俗文化論』78 ページ

⑤ 西原町の古い集落の立地

『西原町史 西原の民俗』によれば、西原町の古い集落の立地は下記の通りとなる⁵。

南向斜面の集落 17 集落

幸地、棚原、森川、千原、上原、運堂、翁長、呉屋、小橋川、内間、掛保久、嘉手苺、崎原、与那城、我謝、桃原、小波津

南側 谷底平野・低地 9 集落

幸地、平安佐、徳佐田、森川、小橋川、内間、嘉手苺、与那城、我謝、

東向斜面の集落 2 集落

運堂、津波花

東側 低地 2 集落

翁長 津波花

西向斜面の集落 2 集落

安室、池田

北向斜面の集落 1 集落

谷那堂

北側 低地・麓 2 集落

上原 棚原前

平野・低地 3 集落

中伊保・伊保浜、小那覇、兼久

『西原町史 西原の民俗』は古い集落は 28 ある⁶とし、17 集落が南向き斜面に立地しているという。また南側 谷底平野・低地は 9 集落があると記したが、内 6 集落が、南向き斜面につながっている。2 集落は単独でムイヤモウ（丘）の南側の低地にある。したがって、西原町にある北風をふせぐ立地にある集落は 19 集落、約 70 パーセントということになる。

また、斜面にある集落は 22 集落で、約 80 パーセントである。仲松弥秀がいうよう

⁵ 西原町役場『西原町史 第 4 巻資料編三 西原の民俗』15～19 ページ。1989 年。

⁶ 一つの集落でも、南向斜面、南向き低地の家もあるなど、様々に複合しているので、合計は 27 集落にはならない。

に排水のことを考慮してつくられたのであろうか？

『西原町史 西原の民俗』は1970年代以後、高台地の開発がさかんになったことに言及して、その理由を「生活用水は水道完備で問題ない。住宅も、鉄筋コンクリートの普及により、台風や寒さ対策に問題はない。・・・今日、住宅地として好条件にあげられるのが『展望の良い土地』という自然条件だとおもわれる。」としている。

⑥ 授業構想

① 発問

自分の家がどの方向に向けて窓が多く開けられているか。を問う。

この発問は、全ての子どもが答えることができる。正解はない。子どもそれぞれの家のありようが答えである。ただし、自分のもっとも身近な位置すなわち自宅に立った時、方位が正確に意識されているかどうかは、ぜひ身につけさせたい基礎基本事項である。

全員が自分の家の窓の様子を話す中で、南向窓が多いことにきずくであろう。どうして南向きが多いのか仮説をのべさせ、その後、親から聞き取りをさせたい。

② 質問

①をふまえ、集落は家と同じように南向きを意識して村がつくられているかという問題を設定する。

そのことを確かめるために西原町の地形図を準備する。地形図と子どもたちの記憶（既にある知識）から集落が南向斜面に立地している集落を探させたい。

発見したら、印をつけさせたい。

等高線と方角を読み取ることができるか。地図と体験とをクロスさせることができるか。という社会科の基礎・基本になる力が試される場面である。

西原町の多くの集落がチェックされてい

く。チェックが増えることは、認識の新たな広がりであり、子どもにとっても、教師にとっても楽しいことである。

体験と地図とのズレから多数と異なった見解をもつ子どもも出てくる。また集落によっては南向斜面から南向低地に広がる集落もある。そのことを発見して異論を唱える子どもがでてくる。

根拠の正当性を意識して議論し、根拠があることを評価し、それをみんなで楽しみたい。議論の中で根拠が薄弱となったことやあいまいなことは、ぜひ調べてみたい。

③ 調査

南向き斜面の集落が多いのは何故なのか。一定の仮説を子どもたちが述べさせてもいいが、実際に校区にある南向き斜面の集落を歩かせ、南向き、斜面の謎を探らせたい。

斜面にある家と低地にある家の比較を試みて面白いかもしれない。どちらが風は家を通るのか。飲み水はどうしたのか。昔の農業を主体とする生活の中で、どっちが暮らしやすかったのか？など

そういう議論の中で、命の水であるカー（泉）、そしてその水源である嶽に、自然と注目するようになればよしとしたい。そうならなくても、文化財学習のねらいである地域社会の生活の知恵への誇りに結びつくであろう。（琉球大学）